

活動報告書

報告者氏名：坂本 恭子

所属： 山口県立山口総合支援学校

記録日：2013年2月26日

【対象児（群）の情報】

・学 年 中学部1年男子

・障害名 知的障害、肢体不自由（脳性まひ）

・障害と困難の内容

・発語がなく、意思の伝達手段が限られており、判断が難しいことも多い。昨年までに、スライドスイッチ等で選択表現ができるようになり、言葉や文字、簡単な文章を理解できていることがわかった。

・手の操作性に困難があり、右手が前後左右にわずかに動く。随意で動かせる体の部分が限られ、スイッチの設置場所に試行錯誤した。以前は右手と頭にスイッチを設置していたが、OTのアドバイスにより、現在は右頬にしている。また、強度の側弯と股関節の亜脱臼等のため、座位の保持に困難があり、常にスイッチ場所を確認し修正することが必要である。

【活動目的】

・当初のねらい

日常の学校生活の中で本人の意思を確認する手段として、絵カードや言葉で選択を投げかけ、視線や口、上肢の動き等で返事を判断していたが、判断に迷う場面も多く、本人の意思とは違う結果となることも多くあるのではないかと思われた。また、意思の表出やそれに対する判断が難しいことが、本人の意思や選択を求める機会を少なくしていると思われた。そのため、選択や伝わる経験を重ねることが難しく、伝えようとする意欲も高まりにくい一因になっていると感じた。そこで、わかりやすく表出できる手段を導入し、コミュニケーションが容易になることで伝わる喜びや楽しさを多く重ね、コミュニケーションの意欲やスキルを高めていくことを目的とし、iPadのAACアプリを使用した。

・実施期間 2012年10月～

・実施者 坂本 恭子（教諭）

・実施者と対象児の関係 学級担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

学習や活動へのモチベーションは高いが、家庭に比べ学校での表情や声による感情表現が少なく、コミュニケーションの要素をもつ声の表出が少ない。

学習ではスライドスイッチを使用し、二者からの選択ができる。しかし、日常生活に持ち込む場合、そのつど手の位置に合わせて傾かないように注意しながら支えておかねばならない点や、選択肢を増やしていくことを考えると、1スイッチでの選択がよいと考えた。

・活動の具体的内容

まず、自立活動の学習の中で、遊びを選択し伝える場面を設定した。アプリは、「DropTalk」を使用した。アプリはスイッチに対応していないが、小学部からこのシンボルを使用しており馴染み深く理解しやすいことや、1メッセージでの単純な使用なら、操作するための補助機器の入手や設定が容易なため選んだ。iPadは、専用アームで座位保持椅子の机に取り付けて前面に設置。「DropTalk」のキャンバスに「はい」のシンボルと文字を入れた画像を出し、画面にiPadタッチャーを付けてスイッチにつなげ、ユニバーサルアームを使用して手で押せるように設定した。遊びは2種の絵カードの選択からスタートした。読み上げる際には、視覚的に示すこととともに、後にオートスキャン機能のあるアプリを使用して複数の選択肢から伝えたいことを自分で選択できることに繋がるよう、読み上げるカードを赤い枠で囲んで示した。



・対象児の事後の変化

初めは、選ぶのに時間がかかり、カードの読み上げを繰り返すこともあり、選ぶカードにもばらつきが見られた。しかし、選んで伝える→できる→楽しいの経験を重ねる中で、選ぶ時間も短くなり、選んだ同じ遊びをもう一度選んでリクエストすることが増えた。本人の様子から楽しかったからもう一度やってみようという思いが感じられた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

家以外の場所では、比較的小となしく自己主張が少ない、これまでの応答のコミュニケーションが中心だった対象児だが、取り組みが進む中で要求やあいさつなど、自分から発信しようとする姿が増えつつあり、意欲が育ちつつあることが感じられる。また、伝える方法も、iPad+左頬のスイッチを中心にしているが、それができない時は、その時できる方法で思いを伝えようとする主体的な姿も見られるようになってきた。

当初は、VOCAに言葉を入れ使用していたが、iPadの方が視覚的で、効果的な位置に提示し保持できることや、場面が変わり、違う言葉を提示するときにも本人にわかりやすく伝えることができたことも、本人の意欲に繋がっていると感じた。活用するための環境設定に難しさはあるが、使用範囲の多様さや設定・切り替えの容易さ、操作の簡単さ、価格面等からもiPadは対象児にとって有効な支援機器であると感じた。

・エビデンス（具体的数値など）

継続して「DropTalk」を使うようになって、スイッチを押す回数が増えた。しかし、確かな意思の表出と感じられるときと、不随意の動きなのか、ただスイッチを押してみているのか判断が難しい場面もあり、結果を数値化することが難しく感じられた。

・その他エピソード（画像などを含めて）

現在は、iPad を常時、座位保持椅子に設置し、学校生活の様々な場面で活用し、伝える経験を広げている。その中で、特に印象的だった場面は、登下校時のあいさつと遊びの場面であった。

以前はあいさつをされると、促されて口を動かすこともあったが、反応がみられないことも多かった。そこで、登下校の挨拶タイムがコミュニケーションを楽しめる場面になるように、「DropTalk」とスイッチでの挨拶に挑戦した。すると、先生や友達の反応がひととき大きく、褒められたり驚かれたりすることが格段に増えた。登校直後は反応や笑顔が少ない日が多いが、褒められた後は、かすかな笑顔やスイッチを押す回数が増えた。また、登下校時にエレベーターに乗ると、鏡に写った自分を見てニヤッと笑い、必ず何度もスイッチを入れて挨拶してみる楽しげな姿や、スイッチを設定すると同時に自分から挨拶する姿も見られるようになった。



最も確実に意思が伝えられたのは、余暇等で音楽を聴いている場面だった。イヤホンが耳に対して大きいことや音楽を聴きながら頭を動かすため、はずれて落ちることが多く、困ったような顔をしてじっとしていることが多かった。そこで、大好きな音楽鑑賞中、困ったら、「先生、来てください！」と援助を求めることをねらい、場面設定をした。すると、イヤホンがはずれるとほぼ確実に教師を呼ぶことができた。また、スイッチの位置がずれていても、他の場面では見られないほどの頑張りでスイッチを押す姿や

スイッチを押してもスリープ状態で反応しなかった時には、「ウ～」と声をだして周囲の教員を呼ぶ姿も見られ、伝えようとする強い意欲が感じられた。しかし、イヤホンが落ちていないのに教師を呼ぶことが数回あり、不随意の運動によるものなのか、別の意図があるのかについて考え、援助と、要求を分けて彼の思いをくみ取れるような工夫が必要と感じた。

また、機材等の準備が整い、オートスキャンの機能を理解し操作できるようになることをねらいとし、「SoundingBoard」をスイッチで操作し、2つのカードから好きな曲を選んで聞くことに取り組み始めた。

この一年、彼に合わせた機器やアプリ探し、活用するための環境作り等の試行錯誤に長く時間を費やしたが、落ち着いた取り組みがやっとスタートして、わずかながら手ごたえを感じ始めている。外への持ち出しや家庭と共同実践までには至らなかったが、これは次の課題として取り組みたいと考えている。

今年度、初めて重度重複の生徒を担当したのだが、どんなにのどが渇いていても、目の前のお茶を飲むこともできず、すべてを支援者に委ねる彼の生活について改めて考えた。この度の取り組みが、これからの彼の生活や、彼とご家族、関わる周囲の人たちの関わりを、より豊かで楽しいものにする方法の1つになればとても素敵だと思う。まずは、自分の思いを主体的に伝えたり楽しくコミュニケーションしたりすることが可能になり、日々の生活が豊かで充実したものとなるよう、取り組みを続けていきたいと思う。

また、それが叶う、たくさんの選択肢から思いや要求を選んで伝えることができるスイッチインターフェイスに対応した”夢の“AACアプリの完成を心待ちにしている。